台大日本語文研究第 35 期
2018 年 6 月，頁 1-31
2018-03-19 收稿，2018-05-01 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.201806_(35).0001

小說創作題材的來源與異國旅行實踐的關連
—以井上靖、松本清張和司馬遼太郎三者間的比較—

蔡宜靜*

摘要

昭和時期的井上靖、松本清張和司馬遼太郎這三位代表作家都善於以日本歷史的題材創作小說。筆者特別感興趣的是他們對於異國關照所衍生的創作主題，成為歸結各自創作原點和晚期作品方向時的意外共同之處。除此之外，值得注意的是他們在戰爭時期都擁有海外派兵經歷，首次實質的海外旅行經驗都發生於近五十歲左右的年紀，這樣的旅行動力也都持續到各自晚年，並且與此相應留下許多旅行紀行隨筆和書籍。本論文一方面整理各自的海外旅行經歷和關注議題的焦點為何，同時也對比各自初期和晚年創作題材與異國旅遊實踐的關聯，試圖就三位作家在處理小說題材或相關內容時的著眼點的差異為何進行整理。以結論來看，筆者認為他們的旅遊經歷不僅在驗證各自創作題材導入外國要素上提供了參考前提，透過釐清各自在海外戰爭的體驗和感想，也為各自晚年作品的選材方向提出值得參考的解讀方向。綜合以上的考察期望提出今後於檢視三人以外國歷史觀看角度進行調整本身的日本歷史看法時可相互呼應的佐證資料。

關鍵字：創作上的題材，異國體驗，井上靖，松本清張，司馬遼太郎，戰爭體驗

* 玄奘大學應用外語學系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Relationship between the Source of Novel Theme and Overseas Travel Experiences - A Comparison of Inoue Yasushi, Matsumoto Seicho and Shiba Ryoutaro-

Tsai, Yi-ching *

Abstract

In the Showa period, three representative authors, Inoue Yasushi, Matsumoto Seicho and Shiba Ryotaro, are good at covering Japanese history topics in their novels. What is most interesting for me is that they all have the unexpected intersection and similar consequences in their works as the premise themes from their overseas viewpoints during foreign travelling or war experiences. Another noteworthy thing is that they all had their first overseas trip around ages 50s. Their motivation of going abroad continued to their last life years, and they left many essays about travel. In this paper, I focus on their overseas experiences to compare their creative works of the early and late years related to their foreign travel experiences to clarify how different their ideas dealing with novels subjects are. In a conclusion, their travel experiences provide the premise of verification about foreign elements in their works to indicate the suggestion for deciphering the change in the most recent works, and to provide a reference when verifying the mutual agreement between the observations of their foreign histories and the adjustment of the viewpoints on Japanese history.

Keyword: Creative Theme, Overseas Travel Experiences, Inoue Yasushi, Matsumoto Seicho, Shiba Ryotaro, War Experience

* Associate Professor, Department of Applied Foreign Languages, Hsuan Chuang University

臺灣大學學術期刊資料庫

小説創作題材の源と異国旅行実践との関連
―井上靖、松本清張と司馬遼太郎の三者間の比較―

蔡宜静*

要旨

昭和期の井上靖、松本清張と司馬遼太郎の三人の代表的な作家は日本史の題材を生かした小説創作を得意としていた。筆者が特に深く興味を感じる点は、各自の創作上の原点から後期の作風を概観するに、三人とも異国を観照した体験からそれぞれの創作上の題材を生み出している、という意外な共通点である。ほかにも注目すべきなのは、戦時下の召集で海外での戦争体験を共有しているのみならず、初めての海外旅行がほぼ50代前後になってようやく実行に移されており、以後、晩年まで旅行への意欲を持続しているということである。本研究ではこれら三人の海外旅行に示された関心と焦点を整理したうえ、初期から晩年に至るまでの創作上の題材と海外体験とを対照させつつ、三人それぞれが扱っている小説の題材や内容上の着眼点の相違を明らかにしたい。結論から先に言えば、彼らの旅行体験は小説執筆の題材に含まれる外国関連の諸要素を検証するうえで貴重な土台をなしており、また、各自の海外での戦争体験をも導入することにより、最晩年の作品における題材選択の真意を解読するうえでも示唆を与えてくれる。以上の考察により、これら三人が外国史を観照する角度から客観的に、しかも読者を感動させる姿勢で日本史を眺めていることが窺い知られる。

キーワード：創作上の題材、異国体験、井上靖、松本清張、司馬遼太郎、戦争体験

* 玄奘大学応用外国語学系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

小説創作題材の源と異国旅行実践との関連
―井上靖、松本清張と司馬遼太郎の三者間の比較―

蔡宜静

一、はじめに

周知のように、井上靖、松本清張と司馬遼太郎の三人の作家は歴史に取材したものを得意としていたばかりでなく、異国への憧れと現地への取材などでそれぞれの小説作品へ盛んに外国関連の要素と題材を取り入れている[1]。ここで興味深いのは三作家とも処女作の小説において、異国への憧れからその地への旅に関わる諸要素を取り入れているばかりでなく、新聞社での取材活動を通じ、人生最初の海外旅行を果たした、という共通点があることである。また、三作家とも初老期での初の海外旅行以降、最晩年に至る海外旅行を実行し、旺盛な創作を続けている。そして異国と日本のそれぞれの歴史に関して行った思索を、まず旅行関連の随筆紀行集へ書き綴り、そのうえで関連する小説を創作している。本論文ではまず、三作家の小説群から異国関連の要素や設定を摘出・整理し、旅行と創作との間の関連性を明らかにする。次に、彼らの旅、とくに戦後の平和な時代の海外旅行や海外での戦争体験が各自の歴史観にもたらした影響を考察し、彼らが小説作品で扱っている題材と対照し、各自の作風上の特色を分析したい。以上の研究プロセスを通じて、彼らの小説創作の題材源と旅行との間の関連性を明確にできよう。

二、三作家の小説群に見る異国に関連した設定と実際の旅行体験

本章では三作家の小説作品に見る異国に関連した要素を整理しつ

[1] 井上は中国、とりわけ西域に関わる題材を『楼蘭』(1958) の創作背景に生かした。松本は『北の詩人』(1962) などにアジア各地を舞台設定として取り入れたばかりでなく、中近東やヨーロッパの名所を作品の背景として生かしている。司馬は、日本周辺の国々を作品の舞台として取り入れた。例えば、『坂の上の雲』(1972) におけるロシアと、『空海の風景』(1975) における中国がそれである。

臺灣大學學術期刊資料庫

つ、それらの題材設定における特徴と各自の旅行体験との関連性を対照したい。とくに三作家が新聞社などと提携して行った海外取材、または作家代表の一員としての海外訪問にも目を配りつつ、三作家間の旅行経路と旅行先に見る差異を考察し、各自がどのような国または時代の歴史へ関心をいだいたかということを明らかににしたい

（一）井上靖の旅行体験と小説における設定との関連性

井上靖は 1950 年、『闘牛』により本格的に作家デビューを果たした。彼は 1951 年には毎日新聞社を退社し、以後、作品の執筆と取材講演のための旅行を続けた。彼の小説における舞台設定は大まかに言って、(1) 西域、(2) 中国内地、(3) 韓国、(4) 欧米という計四つの項目に分けられる。次に項目ごとに内容を検討してみよう。

（1）西域

井上は青年期からすでに西域と中国へ深い関心を寄せていた。彼は学生時代に白井長助（1933）『上代于闐国の都城の位置に就いて』（富山房）、藤田豊八（1932）『東西交渉史の研究』（岡書院）といった西域関連の史書や旅行記を読みことに「うつつを抜かし」ており、西域への憧憬は生涯にわたり持続した[2]。しかしながら、彼が実際に西域の地を踏んだのは、58 歳に達した 1965 年のことであった。このときは、ひと月を費やして旧ソ連の中央アジア地区を旅行し、「多年夢見ていた」西トルキスタン地域を旅したのである[3]。この旅を実行するに先立って、作品の背景に西域と中国内地を取り入れた小説がすでに 18 篇にも達していた[4]。まだ西域に旅行する経験のなかった井上は、これらの作品において自分の想像力に基づき、シルクロードという魅惑的な響きを昭和の文学界にもたらした。彼自身は初めての西域の旅について「青年時代の夢の一端を果すのに、58 歳ま

2 （2007）「井上靖の西域史」『別冊太陽井上靖の世界：生誕 100 年記念』平凡社。
3 福田宏年（1992）「解題」『井上靖歴史紀行文集第 3 巻』岩波書店。井上が急ソ連領シルクロードを訪れたこの旅行は、彼自身が旧ソ連の国営旅行会社との間の面倒な交渉を経てようやく実現した、個人的な旅行であった。
4 海外体験もしくは外国史を背景とする受賞作だけを見ると、1958 年には『天平の甍』が芸術選奨文部大臣賞を受賞し、1960 年には『楼蘭』と『敦煌』が毎日芸術賞を受賞し、『蒼き狼』は文芸春秋読者賞と受賞している。

臺灣大學學術期刊資訊網

で待たなければならかなったのである」と回顧し、「小説「敦煌」を発表してから、いつか 20 年の歳月が経過していた。長い間、自分が書いた小説の舞台に自分の足で立ってみたい思いはあった」[5]と説明し、自分が想像で書いた作品の舞台に立ってみたいという思いはかねてから抑えがたい気持ちが伺える。現実と小説の間の既視感について、「宋、西夏の 11 世紀の頃と同じものは、陽の光と、風の音と、そしてその町々を取り巻くゴビや砂漠であろうか」と述べ、「小説の世界と、現実とが入り混じり、錯綜し、それを解きほぐすのに、多少の時間を要した」[6]と述べている。年譜を参照する限り、井上はその後も西域の旅を続き、ほかの国と組んでいる旅が計 6 回数えられる[7]。これらの旅行から彼が自作に生かした異国の背景に必ず訪れようとする意欲がわかる。これらの旅行に相応し、彼は紀行文集を多数出版し[8]、彼の積年の西域への情熱を書き記した。西域の旅が彼へ与えた直接的な影響としては、おそらく『シルクロード詩集』(1982)の試みと発行である。刊行こそ後期のことであるが、小説家となる以前から、井上は詩人を志向しており[9]、『西域物語』(1968)において、そうした詩情を再発見したものと思われる。この紀行随筆では五章を費やして現地の旅の感想を語り、その第四章では「西域の詩

---

5 井上靖 (1977)『遺跡の旅・シルクロード』新潮社。

6 井上靖「「小説『敦煌』の舞台に立ちて」」(1992)『井上靖歴史紀行文集第 2 巻』岩波書店。

7 1971 年にはアフガニスタンとネパールを訪問した。1973 年にはアフガニスタンを再訪するとともにイランやトルコへも足を伸ばした。1977 年にはエジプトやイラクを歴訪したのに続き、約 3 週間にわたる訪中により、新疆ウイグル自治区を旅行した。三回目のシルクロードへの旅で多年来の念願だったウルムチ、イリ、トルファン、ホータンを巡り、タクラマカン砂漠にも足を踏み入れた。1978 年には、初めて敦煌を訪問した。1979 年には、NHK 取材班と映画撮影班とともに西域各地を旅行した。1980 年には、再度 NHK 取材班に同行した。

8 『西域の旅』(1966)、『西域物語』(1968)、『西域紀行』(1969)、『アレキサンダーの道』(1974)、『遺跡の旅・シルクロード』 (1977) 、『私の西域紀行』(1978)などが挙げられる。また、司馬遼太郎との共著『西域をゆく』(1978)も著した。

9 「年譜」(1992)『井上靖歴史紀行文集第 4 巻』岩波書店。井上は中学時代から書き始めた詩稿を生涯手離さずにいた。1930 年、「井上泰」のペンネームで北陸四県の詩人が拠った詩歌雑誌『日本海詩人』へ投稿した。ただ、処女詩集『北国』を刊行したのは 1958 年、51 歳の時である。

臺灣大學學術期刊資料庫

人たち」と題している。砂漠の国々の風土を「時に異様な五彩の虹の如きものを起らせる」と表現している。シルクロードへの数度にわたる長期の旅行は、徐々に彼の青年期以来の詩情と詩作欲とを改めて喚起したものと見て間違いあるまい。

（2）中国

井上は 1957 年 10 月、日中文化交流協会からの誘いにより日本作家代表団の一員として初めて中国を訪問した以来、公私にわたり中国との交流活動に携わり、亡くなる三年前の 1988 年 5 月までの訪中回数は総計 27 回にも達し、中国との関わりは実に深い。その中でも中国仏教には大きな関心を寄せている。1979 年、彼は中国訪問後、そのままパキスタン北部への旅に出かけ、以前から暖めていた仏教遺跡歴訪を果たした。と同時に、遠い昔この地を経過した玄奘三蔵の足取りをも追い、パキスタンの南北に長い国土を縦断することをも考えていた。ここには作品執筆に際しての取材をゆるがせにしない謹厳な作風が窺われよう。中国を舞台にした井上の主要な歴史小説としては、『天平の甍』（1957）、『敦煌』（1959）、『蒼き狼』（1959）などが挙げられるが、これら諸作品を執筆するに当って、彼は事前に中国へ取材に赴いたことはなく、あくまでも日本で得られる資料と想像とによって組み立てている。たとえば、訪中に際し、井上はすでに『天平の甍』の連載を終えていたが、実際にこの作品の舞台たる揚州を訪れ、自己の目でゆかりの場所を見ることができたのは、1963 年 9 月の第三回目の訪中時になってからのことである[10]。唯一の例外としては『孔子』（1989）が挙げられる。その執筆に際し、孔子の生まれた曲阜など、ゆかりの土地を数回に渡って訪れているのである。その史実を重視する姿勢について、山川泰夫は次のように感嘆を交えつつ述べている――「孔子の故郷の山東省曲阜はもちろん、孔子が弟子を連れて遊説した列国の所在地、河南一帯を五回も訪れて、史跡や孔子ゆかりの地を取材している」。同氏によれば、井上は「80 歳の高齢で構想 10 年の長編小説『孔子』に着手」したと

[10] 井上靖（1997）「揚州紀行」『井上靖全集第 26 巻』新潮社。p.492。

臺灣大學學術期刊資料庫

されており[11]、井上が遺作とも言うべきこの作品にいかに強い意欲を注ぎ込んでいたかが窺い知られよう。井上は長きに渡って日中文化交流協会に貢献し、のちには会長をも務めており、両国の文化交流の促進と友好関係の発展に寄与している。こうした点から、最終作の主人公に孔子という日中両国にゆかり深い大思想家を取り上げた背景もおのずと理解されよう。井上の長男・修一はドイツ文学を専攻する研究者であったが、子息の見るところでは、「父は、孔子を思想家というより政治家として見ていた」[12]とされている。したがって、井上がこの作品に託した思いは、おそらく彼の中日交渉史と関わりのあるものであり、孔子のような歴史を重んずる政治家が日中両国に現れ、両国間の深い意味での理解と和解とを推進してほしいと考えていたのではないだろうか。

（3）韓国

井上は「元朝秘史」の伝説に基づき、『蒼き狼』（1959）の中でジンギスカンの生涯を描いたが、この歴史小説をめぐって、大岡昇平との間に有名な論争を起こした[13]。大岡の批判は要するに、井上が文献史料にのみ頼り、あまつさえその史料をほしいままに改竄することをも辞していない、というのである。そのため、小説『風濤』（1963）執筆に際しては、『高麗史』、『元史』といった歴史資料ばかりではなく、現地での実見をも重んずるに至り、1963 年 4 月、彼は初めて韓国を訪れたのである。元寇を描いた小説は、多くの場合、襲来を受けた日本の側に立って描いたものであるが、彼は『風濤』執筆に際し、元朝の支配下にあった高麗の民衆の側からも筆を進めており、元と日本との間に置かれ、苦しめられた高麗の立場へも理

[11] 山川泰夫（1992）「中国史を愛した日本人作家井上靖氏」『晩年の井上靖先生』求龍堂。p.207。
[12] 井上修一「井上靖と中国」『関西外国語大学孔子学院の創立５周年特別講演』http://www.kansaigaidai.ac.jp/news/detail/?id=131
[13] 同 2。大村彦次郎「井上靖と文壇」p.104-106。大村は大岡昇平の批判の骨子が「原本になった「元朝秘史」を勝手に改ざんし、みずからのロマンチックな先入観で、成吉思汗像を捏造した」点にあるとした。それに対して井上は、「歴史の中の人間の真実に迫る方法を真剣に考え」、「『風濤』に挑み、その成功で、危機を脱した」と回顧している。

臺灣大學學術期刊資料庫

解を示した。その結果、『風濤』は元寇裏面史としても特異なものがあり、その年代記的な文体は、きびきびした緊密感に溢れており、1964 年、讀賣文学賞を受賞した。井上の二度目の韓国旅行は 1971 年 11 月のことであった。彼は当時『文藝春秋』に連載していた美術紀行「美しきものとの出会い」の取材のため、扶余と慶州を訪れた。そして三度目の韓国旅行は 1976 年 6 月、韓国芸術院からの招きによるものであった。三度の韓国旅行の度に井上はいつも慶州に仏国寺を訪れている。この寺院の伽藍そのものは、豊臣秀吉の侵略に際し火を放たれ、その後の再建を経ているが、奈良の唐招提寺とはほぼ同時期に建立されており、中国仏教と深い関わりを有している。『天平の甍』(1957) 以来の中国仏教への関心が持続していることが読み取れる。そもそも井上は、京都帝国大学では美学美術史を専攻し、新聞記者時代にも美術欄を担当しており、したがって、美術作品を通じて仏教の源流を遡るという角度は彼にとってなじみ深いものであり、それゆえに、中国と韓国の旅に仏教美術を媒介として日本との関連を結びづけるという発想が、ほかにも幾度か活用されている。たとえば、没後刊行された著作『日本古寺巡礼』(法蔵館、1992) や彼が監修した『私の古寺巡礼』(光文社、2004) といった書籍では[14]、旅行先の選定に細心の注意が払われ、それら寺院の歴史や所蔵作品に関する造詣が遺憾なく示されている。寺院や仏教遺跡訪問の旅は、紀行文に描かれたばかりでなく、小説創作へとつながっており、この点、彼の旅行に寄せる意識の高さが改めて認識されよう。

(4) 欧米

1960 年、井上は毎日新聞社からの依頼で特派員として 5 ヶ月にわたり、ローマ・オリンピックを取材した。そののち、ヨーロッパ各地を歴訪し、さらにアメリカへまで足を伸ばしてのち、11 月末に帰国した。この取材旅行体験は、既に 53 歳に達していた井上に、西欧

[14] 梅原猛 (2004) 「序文」『私の古寺巡礼』光文社。梅原は井上の監修に成った単行本 4 冊から成る同書について「執筆者も井上氏の人選で、それは井上氏が甚だ広い交友関係をもっていたことを示している」と指摘している。

臺灣大學學術期刊資料庫

美術開眼の機縁をもたらした。特に、スペインのプラド美術館で出会ったゴヤの大作『カルロス四世の家族』から深い感銘を受けた彼は、「この大作との出会いは、私にとってかなり決定的なものであった」と回顧し、「私自身もまた小説で、このようなものを書きたいといったそんな感動の仕方であった」とさえ激賞している[15]。井上はヨーロッパへは前後 5 回にわたり訪れた。こうした体験を小説の構想に生かし、さらにヨーロッパとアメリカへ旅行した際に目にした実景をも取り込んだ小説として、ヨーロッパ関連では、「ローマの宿」（1961）、「フライイング」（1962）、「古い文学」（1962）と「ローヌ川」（1964）の計四篇[16]が例示できる。一方、アメリカ関連では、日本からの北米移民を描いた小説『わだつみ』（1966）が挙げられる。彼はまた、二度にわたり旧ソ連への旅行を実行しており、最初の旅行から帰国した翌年の 1966 年 1 月から『文芸春秋』で「おろしや国酔夢譚」の連載を始めている。そのほかにも、短篇小説三篇、すなわち、『テペのある街にて』（1966）、『古代ペンジケント』（1966）、『アム・ダリヤの水溜り』（1969）を発表した[17]。その旅行体験も紀行随筆として残されており、とりわけ二回目の旅行からの帰途、シベリア鉄道を乗り継ぐ八日間にもわたるの長い汽車の旅は、井上にとってはよほど印象的であったと思しい。その心震える思いは、紀行文「シベリアの列車の旅」、「シベリア紀行」、「シベリア鉄道にて」などに詳細に綴られている[18]。

井上の小説における舞台設定は、曽根博義が、「気の遠くなるほど離れた土地にまたがっている。空間的な距離だけでなく、一作品内の時間的スパンが長大であることも、読者には周知の事実」[19]と指摘しているように、作者自身の旅行体験から空間的な着想を得ている。とりわけ彼の歴史小説は、次第に年代記的、記録的作風を帯び

[15] 同 2。「ヨーロッパ美術への眼」を参照。
[16] 福田宏年（1992）「解題」『井上靖歴史紀行文集第 4 巻』岩波書店。
[17] 同 3。
[18] 井上靖（1997）『井上靖全集第 26 巻』新潮社。
[19] 曽根博義（1985）「井上靖における《歴史》」『鑑賞日本現代文学第 27 巻』角川書店。

臺灣大學學術期刊資料庫

るに至っており、歴史的な事実の積上げの背後に歴史的な運命観をも描こうとしている点に、彼ならではの特徴が認められる。この点について、江上波夫は、「井上さんの「西域もの」ないし「大陸もの」は明らかに「旅人」型」[20]と指摘している。筆者はこの指摘に同意しつつ、異国の旅の実行をその創造上重要な、恐らくは必需的な条件であったと見たい。海外への旅行へ盛んに出かける以前の長い日々は、井上にとっては一種の沈潜期間であり、後年のさまざまな作品の構想を暖めるための醸成期であったのに対して、実際に旅行体験を重ねて以降の日々は、厚みと奥行きとを持つ作品を執筆するうえでは不可欠な検証作業となった、と言えよう。

（二）松本清張の旅行体験と小説に見る設定との関連性

松本は 1956 年、井上靖から「もう辞めてもいいころではないか」[21]と建議されて長年勤めた朝日新聞社を退社し、47 歳にして筆一本の生活に入った。1964 年、初めて海外へ旅し、その後の 20 余年にわたり、ほぼ毎年、精力的に海外への旅行を重ねた。松本が自作の小説にあって舞台設定に海外を選んだ作品は、計 25 作が挙げられる[22]。彼は旅の取材成果を海外トラベル・ミステリーの舞台設定に生かしたばかりでなく、キューバやラオスといった、当時は日本の一般人の入国が困難であった社会主義国家の現状を取材し、また、日本の古代史に関連して各地の遺跡へ取材をも行った。異国的な要素を取り入れた彼の小説群と、実際の旅行体験との対応関係は大まかに、(1) ヨーロッパ、(2) 中近東、(3) キューバ（アメリカ・カナダ）とベトナム（東南アジア）、(4) 中国と韓国の、計四種類に分けられる。次にそれぞれの内容をまとめてみよう。

（1）ヨーロッパ

年譜を参照すると、1964 年、初の海外旅行でヨーロッパ諸国を歴

[20] 江上波夫（1991）「「旅人」井上靖」『群像日本の作家 20 井上靖』小学館。
[21] 「松本清張略年譜」(2006)『別冊太陽日本のこころ:松本清張昭和と生きた、最後の文豪』平凡社。
[22] 同 21。p.71 に列挙された作品数に基づいて統計した。

臺灣大學學術期刊資料庫

訪し、生涯を通じ計 11 回にわたり[23]ヨーロッパへの取材旅行を行った。1965 年に発表された『ベイルート情報』（別冊文芸春秋）を始め、彼がヨーロッパ・中近東地域を背景に扱っている作品としては、計 12 作が挙げられる。また、海外取材の回数と相応する形で、松本が精力的に作品を量産していた姿が窺われよう[24]。一方、古代史関連の踏査活動が小説の構想に寄与した事例も見過ごせない。彼は『小説と古史への旅』(1983) の中で自己の小説の性質と創作方法について「そういうやり方（私小説）をしないで、ほとんどフィクション、いわゆる小説本来の物語性を生かして書」くと語っており、小説の題材を得るべく異国や古代史関連の遺跡を熱心に旅して回ったことをひそかに誇っているかのごとくである。

（2）中近東

松本はヨーロッパの国々を旅行したときに、中近東の国々までに足を伸ばした場合が多い。たとえば、1964 年に通過した中東諸国の印象を、『砂漠の塩』(1965-1966) におけるシリアの砂漠、レバノンといった背景設定に生かしている。また、1973 年のイランの取材旅行、1978 年の NHK テレビ『清張古代史をゆく』のためのイラン取

[23] 取材体験が書かれた事例だけを以下に摘出しよう。1984 年、『霧の会議』の取材を行った。1985 年には『清張古代史をゆく』の続編準備のため、スコットランドやフランスのカルナック方面を踏査し、巨石文化の謎に取り組んだ。1986 年の取材成果は、『暗い血の旋舞』（日本放送協会、1987）に結実した。1987 年 7 月 29 日からは、長篇『赤い氷河期』と『詩城の旅びと』の取材のため、ヨーロッパ旅行に出発し、10 月 16 日から 3 日間、フランスのグルノーブルで開催された第 9 回「世界推理作家会議」に出席し、会議閉幕後、南仏のマルセイユ、アルル、カマルダ地方へ旅行し、『詩旅の旅びと』の取材に向かい、10 月 28 日に帰国した。1989 年 6 月 11 日からは連作短篇『草の径』取材のためヨーロッパ取材の旅行に出かけ、アイルランド、オランダ、オーストラア、ドイツを歴訪し、同月 25 日に帰国した。

[24] 作品におけるそれぞれの国の背景設定は、『アムステルダム運河』(1969) におけるオランダ、ベルギー、『セント・アンドリュース』(1969) におけるイギリス、『黒の回廊』(1971) におけるデンマーク、イギリス、スイス、『白と黒の革命』(1979) におけるイラン、『聖獣配列』(1983) におけるイギリス、スイス、『霧の会議』(1984) におけるイギリス、スイス、『暗い血の旋舞』(1987) におけるオーストラリア、チェコ、『赤い氷河期』(1988) におけるドイツ、スイス、デンマーク、『詩城の旅びと』(1988) におけるフランス、『ネッカー川の影』(1990) におけるドイツ、『モーツァルトの伯楽』(1990) におけるオーストラリア、『呪術の渦巻文様』(1990) におけるアイルランドである。

臺灣大學學術期刊資料庫

材旅行を行った。5 年間で 2 度にわたるイラン旅行であり、二回目の旅に際しては、大地震や反政府騒動に遭遇し、これらの濃厚な体験を『火の路』(1973-1974) における背景設定に生かしている。

(3) キューバ (アメリカ・カナダ) とベトナム (東南アジア)

旅行の際に松本が他国の政治活動に示した関心は、キューバとベトナムへの旅行に際しても、松本は当時の国際情勢へ深い関心を示している。1968 年 1 月、キューバ政府主催の世界文化会議に出席し、同年 2 月 25 日にはベトナム民主共和国対外文化連絡委員会からの招待で北ベトナム各地の視察旅行へ出発した。そして最初のキューバ旅行から 5 年後の 1973 年 10 月にもキューバ革命を記念する盛大な式典に招待され、カストロ議長の演説に聞き入り、翌月にはベトナム民主共和国からの招待で「ベトナム古代文化視察団」の団長として再び北ベトナムを訪問している。キューバとベトナムはいずれもアメリカを相手に立ち向かっていた小国であるが、反権力の精神に富む松本は、これら二カ国に強い共鳴を覚えたものとおぼしく、ついには、『ワシントン・ポスト』紙に掲載されたベトナム反戦広告募集の呼びかけ人の一人ともなっている。1968 年にカリブ海に浮かぶキューバに足を踏み入れてのち、松本は 10 年以上をへた 1977 年、取材のためにアメリカ合衆国、カナダの東海岸を旅行し、これらの旅行体験を『空の城』(1978) におけるカナダと『白と黒の革命』(1979) におけるアメリカ、カナダの場面設定に生かしている。また、東南アジア圏の国々に対し彼が示した関心も、その紀行文と小説における情景設定から随所に見ることができる。1969 年、『象と蟻』の取材のため、ラオスに旅行し、同年 12 月 30 日には今度は妻子とともに再度東南アジア旅行に出発し、小説『熱い絹』(1972) の中でマレーシアを描いている。1977 年 9 月に香港へ休暇旅行、1978 年 12 月にシンガポール、ペナン、バンコク、香港などへ取材旅行を行い、1982 年にニューデリーなどを歴訪しており、東南アジアや南アジア

臺灣大學學術期刊資料庫

への旺盛な関心を見ることができる[25]。

（4）中国と韓国

松本は 1983 年に中国とインドを訪問し、特別番組「松本清張、密教に挑む―マンダラに宇宙を見た」(1984 年 3 月 27 日放送)のため、朝日新聞取材班に同行取材している。平安時代初期の真言宗の開祖となった空海の足跡をめぐるテーマは、彼がアジアの古代史に着目した具体例の一つである。取材から帰国後の彼は、紀行随筆『密教の水源をみる空海・中国・インド』（1984）を発表し、「中国篇Ⅰ」（無錫・福州・揚州)、「中国篇Ⅱ」（西安・蘭州)、「インド篇」（デリー・ナーランダー・パトナー・マハーバリプラム・コナーラク・ブバネーシュワル・カルカッタ）という構成内容で空海の入唐前後の事情や、古代インドで成立したとされる密教の発生と伝来に関する推論を交えつつ、自身が中国とインドの各地で得た見聞を書き記している。この旅行も『南半球の倒三角』(1983）におけるインド関連の場所設定に生かされている。ほかにも韓国取材から生まれた小説として、『北の詩人』(1962)、『百済の草』(1963)、『走路』(1963）と『遠い接近』(1971）の計四作が挙げられる。彼の海外旅行における最大の関心事は、以上の例からも古代史研究であるとと言えよう。松本がヨーロッパ、中東、ベトナム、韓国、中国、インドなどの旅行を実行し、同時に日本古代史を自分なりに描き出すべく国内の遺跡をも盛んに訪ねており、こうした豊富な旅行体験が、作家としての後期の生涯に豊かな実りをもたらした、と言えよう。

松本の遺作は未完成の小説『神々の乱心』(1997）である。ここでは、古代史ミステリーに含まれる政治、歴史、宗教などの諸要素を生かしたばかりでなく、彼にとっては異国とみなされる旧「満州国」建国直後をも時代背景として取り入れており、ある意味で集大成的な作品と見なせよう。近代皇室史に明るい原武史は、物語には当時の実際の政治と社会情勢とが折り込まれていると指摘している[26]。

[25] 同 21。
[26] 原武史（2009）「『神々の乱心』を読み解く」『松本清張の「遺言」』文春

臺灣大學學術期刊資料庫

松本は自身の取材で書き上げたルポルタージュ『昭和史発掘』（1964-1971）の中で 2・26 事件を主軸のひとつに据えているばかりでなく、この小説の後半にあってもは「満州国」を舞台として取り入れ、再度 2・26 事件を主軸のひとつに据えつつ、神話と昭和史、皇居と満州を結んで大正時代の日中関係をめぐるミステリーを構想している。この小説の中で、近代天皇制を古代天皇制とつながりものと見るよりも、もっと原始的なシャーマニズムとの関連において眺めるという発想は、彼独特のものであり、他国の宗教に示した彼の見方とも無関係ではない。とくに彼が国際政治に示した強い関心を併せ見ると、彼が「満州国」に絡んだ日中両国の歴史と政治の陰の部分を暗示しようとしていた構想を見通すわけにはゆかない。

（三）司馬遼太郎の旅行実践と小説設定の対応

司馬も松本と同じように、井上からの励まし[27]を受け、産経新聞社を退職し、作家生活に入った。司馬の海外旅行の経路は、『街道をゆく』シリーズの発行された国々とほぼ重なっていると考えて差し支えない[28]。1971 年から 1996 年まで彼は週刊朝日に実に計 1147 回にわたる連載を行い、その中で日本と外国のそれぞれの歴史、地理、人物に焦点をあて考て察し、読者へ向けてその歴史と文化に対する視点を投げかけている。彼の思索紀行で扱われた国々をまとめてみると、とりわけ東アジアとヨーロッパの文化的な少数派に一貫して関心を持ち続けている点が特徴である。具体的には（1）モンゴル、（2）日本近辺の国々、（3）日本と縁がある欧米の国々から成る。

新書。この作品は昭和初期の時代背景に大日本帝国を根底から侵食せんとする新宗教の陰謀を描き、宮中をめぐる陰謀が明らかにされるミステリーである。

27 司馬遼太郎（1991）「雑感のような」『群像日本の作家 20 井上靖』小学館。司馬は自分の辞職の話に対して井上から「それはようございました」」という励ましを受けたと言っている。

28 『街道をゆく』シリーズで扱っている国と都市の順番は、モンゴル、韓国、中国、台湾、南蛮、アイルランド、オランダ、ニューヨークである。ほかの随筆集にも違う都市、たとえば、ベトナムについてのは『人間の集団について』（1973）があり、『長安から北京へ』（1976）、『西域をゆく』（1978）、『ロシアについて』（1986）、『アメリカ素描』（1986）などの取材旅行を行った。

臺灣大學學術期刊資料庫

（1）モンゴル

年譜によると、司馬は 1942 年に旧制大阪外国語学校蒙古語学科に入学し、18 歳のときに「傾倒したのはロシア文学と『史記』の列伝」であり、「小説を書こうとは思わなかったのですが、いわゆる「塞外の民族」の集団としての運命に強い関心を持った」と述べており、「もし彼ら民族の心というものが書ければ、いつ死んでもいい」[29]とも述べており、彼の当時の思いが理解される。彼がペンネームに『史記』の司馬遷に遼かにおよばぬという意味で司馬遼太郎を名乗ったが、このペンネームによる処女作の『ペルシャの幻術師』(1956)は、講談倶楽部賞を受賞し、作家として世に問うた背景からも伺えるように、中世モンゴル人を主題にした小説群は、彼のモンゴル語学習者の教養との関わりが否めない。彼の処女作は、1253 年に蒙古軍団を率いる若き王ボルトルが、ベルシャの町メナムに攻め入ったとき、救世的幻術師が出現し、美姫ナンをめぐってボルトルと死闘を展開する顛末を描いた物語である。ユーラシア大陸のモンゴル、ベルシャ、コンスタンチノープルの数千年にわたる歴史に呪術、幻術、予言能力などの神秘的現象への関心を生かし、初期の幻想小説群について、彼自身が「この小説の中に日本人が一人も出てこない」[30]と説明していることからも、彼の創作上の原点が窺われる。司馬が「40 代まで海外旅行というものをしなかった」理由について、「空想のなかで海外をおもうというのはじつにたのしい」[31]と説明している。ところが、1968 年以降、彼は『歴史を紀行する』などの随筆集においてまず資料を調べた上、日本各地方の持つ風土的気質を取材した。と同時に、旅行中に面会した人物や現地の人々とのやり取りなどに基づき、時系列で小説の登場人物と背景設定を描写しているという方法も確定されている。彼は自分が興味を持っている地域について「中国辺境にあらわれては消える大食、大月、柔然、鮮卑、烏孫、

[29] 司馬遼太郎（1999）「足跡自伝的断章集成」『司馬遼太郎の世界』文春文庫。
[30] 司馬遼太郎（1958）「わが小説のはじまり」『白い歓喜天』凡凡社。
[31] 司馬遼太郎（2001）『以下、無用のことながら』文藝春秋。

臺灣大學學術期刊資訊網

烏垣、大宛、西夏、匈奴などといった国家」を例示し、こうした国々に惹かれた理由を、「中国文明に化せられなかった。儒教化せず、固有の生活形態と論理をまもっていたために、中国からは蛮族とみられた」と説明し、とりわけ、「モンゴル人」と「中国の辺境にびっしりと張り付いているロシア人」[32]に深い関心を寄せたと述べている。これと照応するように、『街道をゆく』の最初の外国の取材先が『モンゴル紀行』となり、その取材の形式もまた、彼のほかの外国取材の原点と見なせよう。遠藤芳信は司馬の 1970 年代以降の作品を概評して「東アジア世界を舞台にして、スケールが大きく、司馬における、世界・国家のとらえかたや、日本人と他国人・他民族との接触・交流・対応をめぐる論理や思想などが凝縮された形であらわれている」[33]と説明している。この観点に筆者も基本的には同意する。ただし、小説世界の広がりは彼の外国旅行の実際踏査経験と連動しており、その旅行経路や範囲と無関係ではないことを、筆者は改めて指摘したい。

モンゴル人が中国で元朝を建てた歴史に引き続き、中国東北部の女真人が中国で清朝を建てた史実を踏まえつつ、司馬は女真族の隆盛と清王朝樹立に立ち会う日本人を主人公にした『韃靼疾風録』（1984-1987）を書き上げ、これを小説の制作を終了した。この点は大いに吟味すべきであろう。外国の「文化と文明」の差異に惹かれ、彼は「文明とはなにかを考える場合、ローマや中国文明などより、遊牧という単純な文明のほうがわかりやすい」[34]という思索的な発言が、その起稿随筆においては随所に看取される。一様に「遊牧」民族であるモンゴル人と女真人を取り上げ、それを小説の題材に取り入れていることに、彼の遊牧民族への関心が終始持続していることを見て取れよう。最終章「女真人来り去る」において、作家は顔を出し、「北京の満洲旗人こそ、当時、正統の標準中国語の話し手」

[32] 司馬遼太郎（1973）『人間の集団について』サンケイ新聞社。
[33] 遠藤芳信（1998）『海を超える司馬遼太郎:東アジア世界に生きる「在日日本人」』大阪フォーラム。
[34] 司馬遼太郎（1986）『アメリカ素描』読売新聞社。

臺灣大學學術期刊資料庫

[35]と説明している箇所からは、彼の徹底的な取材ぶりが窺われる。と同時に、現代中国政府の立場から「たにぶん清朝は夷狄で、よそからきた」ため、その統治事実を「認めたがらない」[36]という興味深い観点を説明している。ここから彼の歴史を見ている姿勢が伺えよう。ともかく以上の二つの小説の遊牧民族を扱った背景には、司馬自身が経験した悲惨な昭和の戦争に対する批判的寓意が込められていよう。『韃靼疾風録』には文明爛熟した明帝国内部の内紛と政治腐敗に対し、清太祖ヌルハチや太宗ホンタイジ、摂政ドルゴンの野生と清廉、戦闘者としての規律、多民族主義への寛容などが描かれている。そればかりでなく、鎖国で切り捨てられた海外在留の日本人も描かれている。この設定からわれわれに連想されるのはやはり、日本政府が建国した「満州国」であろう。満州族をも利用対象とするいわゆる「五族協和」というスローガンは、日本中心主義の隠れ蓑に過ぎなかったが、司馬はこの歴史的事実を踏まえつつ、この小説の中で満州族の作った清朝を、日本の侵略で樹立した満州国とはおよそ対照的なものとして描いている。こうした昭和時期の日本政府の他国の侵略行動の誤謬を批判している彼の立場は、『モンゴル紀行』の中の「ノモンハンの悪夢」からも裏付けられる[37]。

（2）日本近辺の国々：韓国と中国

『街道をゆく』の収録した日本近辺の国々は、『第 2 巻韓のくに紀行』、『第 28 巻耽羅紀行』、『第 13 巻壱岐・対馬の道』の韓国関係の 3 冊、『第 19 巻中国・江南のみち』、『第 20 巻中国・蜀と雲南のみち』、『第 25 巻中国・閩のみち』の中国関係の 3 冊、そして台湾を取り上げる『第 40 巻台湾紀行』が挙げられる。尾崎秀樹はこの紀行文集の紀行の道程について、日本から始まり、韓国、中国と伸びていく道

[35] 司馬遼太郎（1987）『韃靼疾風録』中央公論社。
[36] 同 35。
[37] 「自国領を戦場とし、3 千人ばかりの戦死者を出したモンゴル人民共和国としては、自国の領土を通過する日ソ両国の攻略という次元からこの事件を見ることは出来ず」と説明している箇所では、日本政府の隠そうとした事実を露に風刺するとともに、当時まだ旧ソ連の衛星国としておよそ自由な言論の許されなかったモンゴルの国民の声を見事代弁してもいよう。

臺灣大學學術期刊資料庫

順に着目し、「それがふたたび日本へもどってくるところに、彼の東アジア文明論のおもしろみがあるのかもしれない」[38]と指摘している。司馬自身も自分の発言においてそのことを明かしている。たとえば、彼は広い国土をもつアメリカへ行っても、「日本文化の中で育った者のごくなだらかな関心として、中国がいつもそこにある」と述懐し、「頭の中に、中国文明という白地図がある。つねに白地図でなければならない。それをとりまいている周辺の、日本とか、朝鮮、ベトナム、モンゴルとかといったような、小国家の山河や歴史や現状、あるいは文化を通してながめることが好き」[39]と自身の旅行の原点を告白している。

『街頭をゆく』で用いた取材方法の特色は、彼が取材先で目にした事実を事前に調べた文献と照合し、地元の人物が土地自体の歴史を物語る際の素材を拾いながら記述していくという手法の繰り返しにある、と言えよう。旅先で得た発想は、日本自体も世界全体の一部として捉えるべきな視座へフィードバックしながら、彼は東アジア圏の一環として日本を見、日本をその辺境に位置づけようとしている。そのため、彼がかつて抱いたモンゴルの平原に雄飛する夢を小説にした方法には、紀行文集の取材特徴が取り入れ、『空海の風景』（1975）の唐代を背景に空海という人物像を通じ、中国と日本を往復させるという発想へ到達したのである。司馬はしばしば「在日日本人」と自称し、東アジア世界と中国周辺民族への関心を示している。このような思想をいだいていたため、ほかの二人の文学者と比べ、小説における異国を用いた背景設定はあまり多くない。それでも、小説に取り上げた日本近辺の国々の要素は、彼の紀行文集にあって隠喩的な観点としてしばしば用いられている。『街道をゆく』シリーズのほかにも『長安から北京へ』（1976）、『対談中国を考える』（1978）、『西域をゆく』（1978）などの随筆文集を出版した。井上靖と陳舜臣とともに中国の旅へ出かけ、対談を交わし、古来密接な中

[38] 尾崎秀樹（1974）「司馬遼太郎の世界」『司馬遼太郎全集 32』文藝春秋。
[39] 司馬遼太郎（1986）「あとがき」『アメリカ素描』読売新聞社。

臺灣大學學術期刊資料庫

国を理解しつつ日本を考えるという三人の見方が同時に窺い知られる。また、『座談会・朝鮮と古代日本文化』(1978)、『日韓理解への道』(1983)、『歴史の交差路にて』(1984)、『歴史の舞台』(1984)などにおいて在日韓国人文学者として名高い金達寿らと日韓関係について対談し、東アジアの国々の興亡のドラマを辿り、互いに今後の外交について望ましい在り方を模索している。

(3) 日本と縁がある欧米の国々

司馬がアジア以外の国を取材したものは、比較的少ない[40]。ほかにも『日本人と日本文化』(1972)と『世界のなかの日本』(1992)においてアメリカ人日本文学研究者ドナルド・キーンと対談の形で鎖国から明治を経た日本人の基礎とモラルなどの議題について語り合っていることは見落とせない。また、『ロシアについて』(1986)では隣国ロシアの歴史をつぶさに検証し、ロシアの本質に迫りながら、両国の新たな未来を模索すべく筆を進めている。司馬がこれらの国々に着目した理由は、これら諸国がいずれも日本の歴史と相当に縁があるためであり、司馬は自ら設定した問題を探究し、その答えをそれぞれの国の上に自分の目で確認すべく訪れたのである。司馬はかつて「ヨーロッパは二度行った。最初は 1972 年のことで、何の主題ももたずに行ったために、道中、はなはだしく徒労を感じた」[41]と述べている。この点から見て、彼は欧米諸国への紀行目的を徐々に修正していったことが知られる。スペインとポルトガルへの旅に関して、司馬は「日本における大航海時代の影響を源流の地で感じたい」という目的で出かけ、日本史の南蛮時代、切支丹禁制と鎖国によって幕が閉じてしまった時代へと遡ろうとした。また、アイルランド紀行は文学者への言及が多く、この旅に忍び込むための回路は主に「国家」の定義の探究である。そして、ニューヨークの旅に

[40] 『第 22 巻南蛮のみち I』と『第 23 巻南蛮のみち II』のスペインとポルトガル関連の 2 冊、『第 30 巻愛蘭土紀行 I』と『第 31 巻愛蘭土紀行 II』のアイルランド関連の 2 冊、『第 35 巻オランダ紀行』のオランダ関連の 1 冊、『第 39 巻ニューヨーク散歩』のアメリカ都市関連の 1 冊だけが認められる。

[41] 同 39。司馬遼太郎「私にとっての“白地図”」を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

おいて日本と近隣諸国との関係を考えながら、アイルランドをはじめとする移民の史実とアメリカの「文明」を探究しようとする司馬の構想が窺われる。さらに、彼は「小国」オランダの言語を学んだ日本人、たとえば、福沢諭吉ら着眼し、この国が 16 世紀の末に独立を果たし、海外に飛躍した事実から日本との縁を探究している。

以上の国々の共通的な特色は、筆者が思うにはほぼ海に隣接している都市もしくは海に囲まれている国と言えよう。彼の旅先の地理的な特徴と歴史上果した役割とを小説における場面設定に活かしている。例えば、『菜の花の沖』（1982）は、江戸時代の廻船商人である高田屋嘉兵衛を主人公とした歴史小説である。この後期作品では、和船の設計や航海術の描写をはじめ、随所で彼の思弁的な史論を述べつつ、後半で日露関係史への知見を生かしている。日本から飛び出し、隣国の国と関連した人物として、東アジア世界を舞台にした空海を、ロシアと関連した人物としては高田屋嘉兵衛を、そして中日両国間を往復した人物として、創作上の人物ながら桂庄助が挙げられる。司馬のこうした日本に固執しない立場は、『竜馬がゆく』（1963-1966）において主人公の世界観を描いた時点ですでに顕著である。この描写はまた、彼自身の旅行スタイルを予告してもいるのである。前出の遠藤芳信は「『菜の花の沖』のつぎに『竜馬がゆく』を読むほうが、司馬における海のしごとや船乗りの世界のとらえかたが理解できる」[42]と指摘している。筆者もこの見解に賛同する。言い換えれば、遊牧民的生活に着目した彼の初期の見方と実際の旅行経路とを考え合わせてみると、彼にとっての漂泊者とは、当初遊牧民を意味していたのが、次第にそれが船乗りへも敷衍されていると言えよう。『空海の風景』、『菜の花の沖』、『韃靼疾風録』といった諸作品の世界は、その後、『竜馬がゆく』に至って、出稼ぎ農民など国内であれ海外であれ各地を転々と移動する労働者の心情を把握しそれを具体的な描写に活かすに至っている。

[42] 同 33。

臺灣大學學術期刊資料庫

（四）三人の異同の比較

以上の考察から三人の海外旅行と小説創作との関連は明らかになってきたものと思われる。三人の共通項はともに日本の周囲の国々に関心を示したという点である。井上と司馬はともに「日本作家代表団」の成員として訪中しただけでなく、共著の対談集『西域をゆく』（1978）をも世に問うている。司馬と松本はそれぞれ 1975 年、1984 年の時点において空海と密教に関心を示し、探求を目指す旅に出かけている。ただし、井上は三人の中では中国訪問の回数が最も多く、中国との関係が最も深いと言えよう。また、三人ともに欧米の旅行体験を持つが、松本は三人の中でヨーロッパに出かけた回数が最も多く、それにかかわる場所が設定された作品数も最も多い。三人の中では、外国旅行に訪れた国の数と異国関連の場面設定を小説に生かした作品数が最も少ない。結論として、井上は青年時代から西域に憧れ、同地への旅行も実行に移しており、その後は主に中国へ集中的に旅行し、最終作もまた『孔子』を選んでいる。松本の場合はヨーロッパへの旅から始めたため、背景設計にはヨーロッパ諸国が取り入れた小説が最も多い、のみならず、異国の古代史と政治議題へ持続的に強い関心を寄せていたため、中近東とキューバへ取材しているのは、三作家の中では彼を見るのみである。こうした旅行体験を経て松本は後期にあっては、近代昭和史と日本古代史とへ関心を寄せ、未完の最終作『神々の乱心』へその思いを結実させようとしていた。そして、司馬はモンゴルへの旅からスタートし、後年は主に日本周辺の国々との文化上の差異を探究すべく、韓国、中国、台湾、ロシアなどへ度々取材旅行に出かけ、幕末の明治期と関連がある西洋の国々へも取材を重ねた。彼の処女作と最終作はともに遊牧民族を扱っているという点で終始一貫する特徴が認められよう。ただ、司馬が小説家としての活躍を比較的早く停止しており、以後は随想や批評を主な活躍分野としたので、異国を舞台設定を取り入れた小説の数量は、ほかの二名よりも少ない。

三作家の旅経歴と小説創作の内容との対照結果をまとめてみると、

臺灣大學學術期刊資料庫

三者間の異同が明らかになった。興味深いのは、三人とも新聞記者としての経歴があり、記者を辞してのち小説創作に身を投じ、そのかたわら、取材旅行を通じて多数の紀行随筆を執筆している。この点もまた大きな共通点と見るべきであろう。創作上の傾向性も、歴史小説の多作という点では似通っているが、井上は戦国時代を多く描き、松本は奈良時代以前の古代史と昭和史に着眼し、そして司馬は戦国､安土桃山時代と幕末の明治期の題材を扱っている｡ただし、管見の限りでは、三作家が歴史小説について意見を交換した機会は二度までしか具体的な例を挙げられなかった[43]。旅行と創作との関連に関する三作家の見解をさらに検証し、とりわけ最終作に至るまでのを思索上の歩みを明らかにするために、海外旅行以前の海外体験をいっそう検証する必要があろう。つまり、三人の昭和期の戦争に対する見方は各自の日本に関する歴史小説の題材の取捨選択と関連があるだけでなく、戦時下の経歴とその段階の昭和歴史に抱いた観点も､彼らの外国と関わる題材設定と関連があると筆者は考える。

三、戦時下の海外体験と最終作のテーマとの関わりへの比較

戦争で海外に送り出される体験も､広義の海外体験に含まれよう。昭和の多数の文学者にはこうした共通的な体験があろう。三人はともに戦後の海外取材の経験から世界観を広げたが、青年期に戦場に送られた体験から受けた衝撃を無視するわけにはゆくまい｡とくに、小説の題材選択に影響があるという仮説を提出したい。古市憲寿は世界中の戦争記念館を訪れ、「日本人は、歴史という『大きな記憶』を紡ぎ出すことに、失敗している」[44]と指摘している。筆者もこの見解に賛同し、そのうえで、ここで取り上げた三人の文学者が戦争体験をどのように各自の作品世界に反映させたのかが先行研究ではなおほとんど解明されていないということを指摘しておきたい。つ

[43] 一つは（1968）「乱世のさまざまな武将-戦国時代は日本史の大ロマンである(座談会)」『潮 92 号』（潮出版社編）で、もう一つは（2011）「1972 年鼎談歴史というもの」」『調査情報第 3 期』（TBS メディア総合研究所編）である。

[44] 古市憲寿（2013）『誰も戦争を教えてくれなかった』講談社。

臺灣大學學術期刊資料庫

まり、戦争体験を有した三人がどのように戦争を語るのを避けたか、またはどのように国家の戦争政策を密かに諷喩したか、さらに、どのような形で若い世代へ向けて日本が近隣の国々にもたらした戦争の傷を反省するように呼び掛けたかということに絞って三者三様の観点の相違を明らかにし、最終作のテーマへと至ったか、という点を概観したい。

（一）井上靖

井上が大阪毎日新聞社の編集部員になったのは、29 歳の 1936 年であり、処女作『猟銃』を発表したのは 42 歳の 1949 年である。この間、日中戦争による応召、内地送還という出来事が挟まれ、大袈裟な言い方をすれば、彼において一個の文学主題の成熟するまでに実に 13 年という長い時間を必要としたのである。1976 年、自らの戦後の気持ちについて、井上は「長い戦争時代の反動のようなもので、なにか贅沢なものを、まったくの遊びを書きたいという気持ちが強かった」[45]と回顧している。しかし、近年に至り、彼の終戦時の未発表日記[46]が公開され、戦争に対する思いが明らかにされた。のみならず、文学形成の秘密がそこには明らかにされている。たとえば、従軍日記[47]によれば、戦時下中国への補充兵として召集された彼の体験は、ある意味では当時 30 歳の青年期後期にさしかかった市民としては一般的な戦場体験の典型だと言える。行軍日記は 1937 年 10 月 7 日の行軍開始、計 130 日間の記録であり、その文章でよく出てくる単語は目視した限りでは、「寒い」(「冷える」) の計 36 回である。戦争の悲惨さを伝える記述が何か所があり、たとえば、「手を縛られている支那の十七八の若年の屍甚だ多し」(10 月 13 日)、「人間は消耗品なりと、戦争は悲惨の極だ」(10 月 23 日)、「この地獄の生活がいつまで続くのか。ふみよ、今度こそは参った」(10 月 24 日)、「みんな略奪に行く。兵隊はドロボー。敗戦国のあわれ」(10 月 28

[45] 井上靖、辻邦生、篠田一士 (1976)『わが文学の軌跡』中央公論社。p.10-97。
[46] 2017 年 12 月 13 日「未発表の日記「欠史時代」戦中から戦後」『毎日新聞』。
[47] 井上靖 (2016)『中国行軍日記』井上靖文学館。

臺灣大學學術期刊資料庫

日）[48]と書き綴られており、その内容はあまりにもリアルに日本軍の内幕を暴露しているがゆえに、生前は未公開とされたのであろう。

井上の次女で詩人の黒田佳子によると、彼は戦争へのアレルギーが強く、戦争に関する話題を避けて来たという[49]。この日記の記述と娘による評価とを参照しつつ、戦争体験が彼の作品にどう投影していたか、ということについて考えてみたい。彼が日本史の中で好んだ題材としても、中国や西域関連の題材としても、歴史を書いているというよりも、歴史を超えた人間を描いているということが明らかである。つまり、一連の歴史小説の底を流れている思想には、悠久な時の流れの中で翻弄される人間の頼りなさ、はかなさを深く認識しつつ、それでも人間の運命相を見詰めているという特徴が挙げられる。たとえば、『天平の甍』では、遣唐船で唐に渡った四人の留学僧の物語に個人の意志や情熱を越え、自然や時間と戦う人間の運命的な姿が徹底的に描かれている。こうした登場人物が遥かな遠景の中の点と化し、歴史そのもの、運命そのものの顔が大写しにされるという特徴は、とくに最終作『孔子』に生かされている。孔子の十四年にも亘る亡命と遊説の旅を描いた井上の思いには、1936 年の日中戦争体験から半世紀を越える歳月の流れとともに、自分の抱いてきた心のトラウマだけでなく、同じ戦争記憶を持っていた同時代の人々の癒しとなるものを求めようとする気持ちもあろう。架空の弟子が語るという設定は、井上自身の人物投射であり、作品の戦乱の背景も彼の戦時下の体験だと見なせよう。冒頭に「早いもので子が御他界あそばされてから、いつか三十三年という歳月が経過しております。その間、世間との交渉はできるだけ避けるように心掛けて参りました」という書き出しは、彼の終戦以来の隠れていた厭世の気持ちだと見なせば、「とるに足らぬ私ごとき者には何もできま

[48] 同 47。
[49] 同 47。黒田佳子「80 年前の時を訪ねて」を参照すると、「父が日記で何度も訴える『国に帰りたい、妻子に会いたい』という叫びは、恐らく殆どの兵隊たちの本音」とした上で、「いくつもの詩や小説、エッセイに、父は体験した戦争の痛みをそっと挟んでいることに気が付」くという感想を述べている。

臺灣大學學術期刊資料庫

せん。世に益するなど思いもよらぬことでございます」という自省した気持ちだからこそ、『論語』の語りから自己の心情と吻合したものを摘出し、後世に残したかったのではないだろうか。筆者がとくに注目したいのは「五十にして天命を知る」に関する問答の内容である。たとえば、「いつ思わぬ障害が起るかも知れないし、いつ中道で斃れるかも知れぬ。大きい自然の摂理の中で生きている小さい人間のすることである。思いがけぬ障害が、思いがけぬ時にやって来ても、いっこうに不思議はない。だからと言って、己が天から与えられている使命に対して、いささかも努力を惜しんではいけない。そういう小さい人間の小さい努力が次々に重なって、初めて人間にとって倖せな、平和な時代が来る」という思索的な叙述がある。ここには彼の戦争体験と日中友好のための努力が暗喩されている、と言えよう。つまり、どんなに苦しくても、決して現世を捨ててはならないという呼びかけ、乱世においてこそ、世の人々を救わなければならないという悟り、成功や失敗などの判断は人間がするものではなく天に任せて、ただひたすら己の信じた道を突き進むべし、という従軍と終戦をへて感得した気持ちがここには吐露されており、こうした心境を井上は同じ戦争体験を持った人々へ、さらには戦争を体験していない若い世代へ残したかったのであろう。

（二）松本清張

松本はかつて自己の創作について「古代史と現代史関係が多く、その中間が抜けている」と自ら批評している。そのうえで「古代史には史料が少ないために、現代史は資料が多すぎるがその価値が定まっていないために、どちらも空白の部分がある。「歴史」はやはり推理の愉しさがなくてはならない」と自己の着眼点の特色を述べている。彼がその『昭和史発掘』（1964－1971）の中で日本近代史上の分岐点と捉えた 2・26 事件について関係者への取材や膨大な史料を駆使しているが、その叙述を読むに、松本の史観の本質を解き明かすことができ、しかも最終作において社会派推理小説の分野を開拓しつつに現代史の謎に切り込んだノンフィクションを目指した理由

臺灣大學學術期刊資料庫

も仄見えて来るであろう。森史朗は松本からの多くの聞き語りに基づき、彼が戦争末期に突然の召集を受け、朝鮮半島で衛生兵として務めた体験により、心に負った深い傷に迫っている。その上で森は、松本が朝鮮龍山に駐屯した際、古参兵から理不尽的な私的制裁を加えられたり、ニューギニア戦線送りの恐怖に怯えた日々を経たりしたことを明らかにし、松本が兵営の中で毎日のように心細い思い出や望郷の念に駆られ、自らの不運を嘆いていたことを指摘している[50]。彼の小説の登場人物は自説に固執し、権威への反抗心をいだく者が多いが、こうした登場人物の原型こそ、彼自身の戦争体験と深い関連があると考えられよう。とくに軍隊の入隊から敗戦に至るまでの見聞にかかわる巨大な権力を握った軍隊という組織の欺瞞性に対する憤りは、作家として立ってのちの松本の独特な史観に投影されているのである。こうした背景から、松本には歴史の謎に迫る作品が多いのもある意味で、史学界の権威に対する異論の提出だと見なせよう。異国の古代史に関して、小説『火の路』(1973)においての自己の仮説を作中人物に語らせているが、この設定にも、そして最終作たる『神々の乱心』(1997)に見える神話と日本近代史とにかかわるミステリーの構想にも、彼の反骨的な姿勢が窺われよう。とくに最終作の中で天皇制の深層を見据えようとした大掛かりなスケールを提示し、新宗教のシャーマニズム的な近代日本国家への反撃を満州の地から開始させている。こうした設定自体が、彼ならではの近代日本国家への諷喩を体現したものと見なせよう。

(三)司馬遼太郎

司馬は 1944 年 4 月、満州の四平陸軍戦車学校に入校し、12 月に卒業してから満州牡丹江に展開していた久留米戦車の連隊小隊長として配属される。戦時下の体験を赤裸々に描いたことにより、彼は昭和期の戦争に批判的な見方を随所に見せているのである。たとえ

[50] 森史朗(2008)『松本清張への召集令状』文春新書。森は「なぜこんな中年になって戦場に送られたのか」という疑問がその後も長く松本に影を落としていると指摘し、その体験が『遠い接近』(1971)における、召集者を決める役場の担当者の恣意性に反映されていると説明している。

臺灣大學學術期刊資料庫

ば、彼はこの体験について「なぜこんな馬鹿な戦争をする国に産まれたのだろう?いつから日本人はこんな馬鹿になったのだろう?」という疑問を叙し、「昔の日本人はもっとまし」と考え、「22 歳の自分へ手紙を書き送るようにして小説を書いた」と述べている。ここには彼の小説の創作契機の一つが明示されていよう。司馬のこうした日本人としてのルーツへの思い入れと探究心こそ、彼が日本で没後 20 年以上をへた今なお幅広い人気を集めている理由[51]となったのである。彼の歴史観は太平洋戦争での物質的かつ道義的な敗北を国民の一人として反省し、過ぎ去った時代を生き直す努力を追体験し、そのために日本人が誇るべき人物や物事をまず次々に掘り起こすことを目指した。これは彼自身の戦争体験を思えば当然の経路というべきであろう。司馬は自己の体験した昭和戦前期という時代を、日本の歴史上、前後から断絶した特殊で異様な時代であるという理由で深く語ろうとしない。これはしかし、語るに値しないという思いからなされた態度とも見られよう。そういう屈曲したものが司馬の中で蠢いているようである。これに対し、「明るい明治」は彼自身の作家としての研究調査によれば合理主義に満ちた時代だと規定されている。作家としての個人の主観がここには明らかに影響しているが、その結果、彼の歴史小説が扱った題材には相当の制約がもたらされるに至った。多くの研究者は司馬晩年の「あまり日本という国に尊敬心を持てませんでした」とする発言を反日的言論と受け取る向きも少なくない。司馬が平素自己を規定する立場として好んだのが「火星人」という用語であり、「火星人になると、日本に対しても、韓国、中国に対しても外国人ですから、やっと同じ水平線上に客観化できます」と述べている。司馬自身のこうした言説から見て、彼の東アジア諸国への関心は、自己の生い立ちからの単なる延長ではなくて、近代の東アジアの諸民族に対する誤解、偏見、差別など、とくに昭和期の日本対外政策をふくめた民族論の呪縛から自己を解

[51] 吉田信行（1998）「中国の“私”と台湾の“公”」『司馬遼太郎の跫音』中央公論社。

臺灣大學學術期刊資料庫

放させたいとする積極的な意志をその内に含んでいた、と言えよう。作家としての彼の着眼点は、遠藤芳信の指摘するように、「脱異の世界にたつ司馬は、『異』なるものへの執着への強調を脱構築することをめざしたが、その脱構築という揺さぶりの先には、積極的に、人間・文化などの雑種混合を理想化し、あるいはその事実の解明を重視していた」という特徴が認められる[52]。如上の先行研究における見解によれば、司馬は最終作『韃靼疾風録』にあっては終始弱者の立場に立ちつつ、主人公の目を通して見た中国における覇権争いを描き出したものと理解されよう。「シベリアのツングース族やモンゴル高原のモンゴル人、いわゆる満州の少数民族である固有満州人、それに朝鮮人、日本人などは、古層としての文化を共有しているといわざるをえない」という彼の発言は、古代東アジア世界が太古においてほぼ共通の原始宗教を営んでいたとする彼の青年期からの原点的な思想がこの最終作にあっても提示されたことを傍証していよう。つまり、彼はこの作品において、日本文化の根源を回顧しながら、小説において悟ろうとする内容を言い切っていたのであり、それゆえにこの小説作品を世に問うて以降は、司馬自身は小説創作から遠ざかり、随想や文明批評などを主たる仕事とし、具体的な考証による歴史評論を進めていったのではないだろうか。

四、まとめ

今回は三作家の異国体験と各自の創作上の異国の題材設定との関連性を明らかにし、三作家の旅行における着眼点と歴史観の異同を明確にすることができた。とくに歴史小説において各自の取り上げた時代の好みは多少とも異なっているが、戦争をも含めた日本近代史から疎遠しようとする立場や批判の見方が伺える。本論文の最終節では各自の戦争体験を最初の海外体験と見なし、それが持つ最終

[52] 同 33。遠藤芳信は「『街道をゆく』シリーズに「天皇の物語」が登場しないことの意味を、わたしたちは深く再認識すべきである」と指摘している。遠藤をも含めて、司馬の旅行紀行に天皇批判の傾向があるとする論者も少なくない。

臺灣大學學術期刊資料庫

作のテーマとの関連性について試論してみた。小説『孔子』は、それ自体が日中両国が文化面で友好を進めてほしいという作者井上の願いの現われであろう。また、『神々の乱心』の中で、松本は天皇制と新宗教と満州という近代史に不可欠な三要素を結び付け、近代日本の踏み込んだ迷路を諷喩しようとしている。そして司馬は、『韃靼疾風録』の中で日本と他民族とを対等に扱うという設定を通じて、晦渋な形で戦争への批判的な見解を示している。おのおの違った形で自己の体験した戦争への想いを込めつつ、読者が歴史を真摯に見据えるため視座を提供しているということが窺われよう。

【参考文献】

「一次資料」

井上靖（1992）『日本古寺巡礼』法蔵館

井上靖（1977）『遺跡の旅・シルクロード』新潮社

井上靖（1978）『西域をゆく』新潮出版社

井上靖（1983）『私の西域紀行（上下）』文芸春秋

井上靖（1992）『井上靖歴史紀行文集』第 2、3、4 巻岩波書店

司馬遼太郎（1996-1999）『司馬遼太郎が語る日本:未公開講演録愛蔵版 1 - 5』東京朝日新聞社

「先行研究」

杉森久英、佐伯彰一（1991）「「猟銃」から「孔子」まで(井上靖追悼特集)」『新潮』88(4)、p.176-186

松本健一（1996）『司馬遼太郎:歴史は文学の華なり、と』小沢書店

司馬遼太郎他（1996）『司馬遼太郎の跫音』中央公論

遠藤芳信（1998）『海を超える司馬遼太郎:東アジア世界に生きる「在日日本人」』大阪フォーラム

文芸春秋編（1999）『司馬遼太郎の世界』文春文庫

臺灣大學學術期刊資料庫

北九州市立松本清張記念館編集（1999-2017）『松本清張研究創刊準備号-18 号』北九州市立松本清張記念館発行

松本健一（2006）『司馬遼太郎が発見した日本『街道をゆく』を読み解く』朝日新聞出版

海知義（2007）「孔子-架空の弟子が語る孔子像(井上靖の世界) 」『別冊太陽井上靖の世界』147、p.124-127

（2007）『別冊太陽司馬遼太郎新しい日本の発見』平凡社

原武史（2009）『松本清張の「遺言」-「神々の乱心」を読み解く』文春新書

尾崎秀樹・藤井康栄編集（1996-1998）『松本清張研究 Vol.1-5』砂書房

久米雅雄監修（2017）「松本清張〈倭と古代アジア〉史考」『季刊別冊』北九州市立松本清張記念館

臺灣大學學術期刊資料庫